



僻研の今日的課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷本, 一之 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9654

“僻研”の今日的課題

谷 本 一 之

僻地教育研究施設が主催した国際シンポジウム「環太平洋の地域研究と異文化理解教育」が、成功裡に終わったことを心から喜んでいきます。僻研の長い歴史のなかで初めて取り組んだこの国際的規模の学術集会を成果あるものとした後藤守施設長はじめ、運営委員、研究員の皆さんの御努力に心から敬意を表したいと思います。

近年の僻研の活動の充実ぶりは目をみはるものがあります。研究員の数も増え、僻研本来の研究を内容とする研究報告も高い評価を得てきています。特に今回のシンポジウムに関連する科学研究補助金（海外学術）を得てスタートした「環太平洋北部地域の僻地教育に関する比較研究」の研究計画は、僻研の新しい世紀を切り拓く重要課題であり、その進展には強い関心と期待が寄せられています。シベリアーアラスカー北海道という三極関係のなかでの小規模校の比較研究から浮かび上がってくる“地域社会と学校”，“自然の中での子供の生活”，“少数・先住民族の教育（アイヌ，シベリア諸族，エスキモー）等の問題は，“地域社会の教育力の回復”，“自然環境を守る教育”，そして“差別の克服”というグローバルな新しい世紀への課題をへき地教育が集約的に抱えているということになります。

へき地教育に熱心な先生方によって、しばしば“教育の原点はへき地教育にあり”というモットーが語られます。たしかにこの精神に満たされた教育実践の例は数多くあると思いますが、へき地小規模校の教育の実践と理論研究は、全体として、いわゆる山間辺地の悪条件のなかで、いかにして効率よく先進的な都市の教育に追うことが出来るかがテーマでなかったかと思えます。高度成長経済政策を背景に、都市生活、産業経済社会に適応するための能力を育てること、すくなくともそういう教育に後れをとらないことが基調になってきていたと言えると思います。「僻地」を「へき地」に、そして「辺地」にしたとしても、山間僻地が教育上、悪い条件であるという認識はあまり変わっていないように思われます。この悪い条件を行政的に克服するというのが学校統合の一つの論拠であるわけですが、いま問われているのは、山間僻地は教育にとって本当に悪い条件なのかということであり、これに対するある意味の答は“山村留学”での最近の経験で出されているようにも思われます。

大規模になり過ぎて管理的な運営を強いられ、そのことの影響が登校拒否や校内暴力に象徴的に示されている現在の都市の学校教育の状況を打開するために、さまざまなことが語りはじめられています。全体に目くばりの利くサイズの学校、ヨーロッパ、アメリカ並みの小人数学級、体験学習の再認識、学校教育を活性化させるための地域の教育力のとり込み等々、生涯学習社会のなかの学校教育という新しい視点によるさまざまな改革試案は、現にへき地教育が行なっている教育の内容そのものであると言えます。ちょうど、埋め立てでもしなければ使いものにならなかった不毛の土地、全く厄介者扱いであった湿原が、いまや地球環境保全の守護神視されていると同じように、山間僻地での“教育の原点”としてのへき地教育は、現代の学校教育の危機、荒廃を救う“救世主”であると言えます。へき地教育のもつ今日的意義を確信させる実践的、理論的研究が、われわれの僻地教育研究施設を中心に展開されることを心から期待しています。